大和小學教導

亡
924
3

敬身第三

人の耳目手足は體とあつまりて身となる故に
ハ人ごとに家乃ごとく耳目は戸窓なり手足
てゐなりの主なりおのゝ家なきゆゑにおのゝ
されバつゝしみて須乃ごとくなれば
主乃ごとくいかりて足乃ごとくに
ことごとくわるくわるくに慈すること
にこゝろ時乃ごとく起坐すべきうしてあんら
ゆゑ身とわるく事なきを敬とつゝしむ
父乃性ハ人ごとにやゝうゐ成人のつゝしみなり

あつうし作家

○古歌

人とかゝ生れつる身はたゞ独しぢ我
いとつゝふかなにわらきみ〻の神
身のへ山りうとをくるといまてく
やとなるわとの身といにを母
矣みてうろうふものあ、よの年の
人恋ちろ恋はふりとこまけろ
なるかうと人すいひてあるまれて
ちろろとういろきてあ毎ん

初ふう矣し古ちるあのまれ
人をわをあはうとてふなるも
事ろりくいろわふ呵ふろ
つ弁よりこいぬ和を見てけま

○殷乃詩を数とこのよたるどいひにるを
うゝこと民よむとひ猶支とうろわになろ
びあ

○周乃武を誠祢ひて太ろをに黄帝
乃ろこと後乃さと伯おるもしば冊書に
とそ中ニこられ武をさあ矣ち敏ろ戸極

廣乃ちまでよとぐく色数のまろを私じき
まのかされい数八黄帝ちもそで海ろてやさん
但第二又象真神ろ云

高岡包犧氏
乾行配天德
仰觀云渾周
俯察方儀形
性彼意意
勒約滿不息
是乾坤乃卦ま数乃象あろうとけく出ろけれ

ば伏羲乃時数とろてと聖ろそなろうつ生まろ乃
ハもとてに出めたまふ又曰

敬勲始欽明
大代精一
南面京茶已
第世立人紀
猗與嘆日躋
戒敬完武烈
茶推千載
穆穆歌止
結且起周禮
魯史何考師
秋月照寒水
刪述本聖軌
是以堯舜高湯文武周孔乃繼の心法も数
なろまもとつくまりけろ又曰

孟生 初四日 曾子 日三省
中庸首章 獨衣 弟 田 尚綱
偉式 鄒孟氏
操存 一言要 雄辯 拙 馳騁
丹書 著明訓 爲爾 撃 叢 欲
何事 千載 條 今古 窓 煥 烱
見人 踐形 坑

見人 歌曾田孟乃ん法もゝ歌なすまとつく為りも
ふ孟子のちみられをとめろいこんはとう
な今だして稲子乃を一を云面とい今ハさんを
わさらめくゝり其子の歌爾ハ稲子四云のむ

稲をけくゝり拙ちりふまりそゝりたづぬべし
○たゞ浮とたゝくんとゝりとゝりとゝりふ面體さ
らに拙ちり活潑こ地ちり卓ゝりる段先笑いみふ
けるよかゝ乃ごし操存といふこれ為り主一やく
つゝもも孟たんる
○ゝゝゝひとゝとゝゝりとゝりとゝ河ハ泥度とゝゝゝ
ゝゝゝゝひとゝとゝゝゝりとゝ河ハ惡度とゝりも
右乃條のゝゝりとハ泥度とゝゝ惡度とゝ
ゝりひとゝすゝりら明義ずゝ乃やまひとゝり
久ゝゝどゝてゝゝゝ

○活潑地といふは、こゝろのあり方の生
きてこれあり、まづうにんとあらそうかたちの
時の者としてわがこゝろ先傷ることを免
漢といつてみなともおがくしぬといふ仁とかろり
○克己復禮仁は六字のうちの和がおを
見ることもなくまつすぐなる色をもつて一
おりまさりにうつくしいよかまバこんと
色二ちやと見てにうちてまいよかんかいこん
とすうあり色こゝろより見てにかうしてまいこと
うへ品をもんとすることは色四あり見てにうち

て色いつよかてそこんとうに色又ありいづまて
先傷の病あつ義うして一ぞあつ跡あまでこと
本・種の四ことあはあつぎあり見てよかう色
いつのうちくこんとすす色品跡なるかくうて
業位のあるうよかあつて行ふつく論語を
よむて克己の功夫あつ人よあつぎたバそこにか
うちにこいつ楊子をいふすのあつん
○聖人のうちはこねどもを聖人の門と聖人の義
といふ今よりあうとへのあることといふよりはなよ
天の廣大みて四時のめぐり日月の往来まのこと

う目のまへの載をれば、さてにもとゝもあくがるる
て人そのこゝろを和らかにしあるこゝろをのぼり
ぬるまこゝろをれんちゝりうの極の大極といこのこと
まや毎箱のみかこれ極あるをこゝろをいめこゝろをてそ
ゝ出ゝくにゝくこゝろをまるもゝ知るを上義至善とゝさ
れば至人のこゝろをまるなゝ人生知安行たゝこゝろ
まゝ止まゝこゝてゝ天とゝ人のうゝ出ゝ人のうゝ出ゝ
てゝこゝろを止まゝ至善人ありとゝ出ゝうゝめゝゝ
故ゝ至ゝ人ゝ希ゝ天ゝこゝろ小学数学箱ゝこの語
とゝいせゝこゝけゝ人身をゝ人の師ゝ

先あんそを先たゝるべし
○人の言に毎箱ゝこゝろあるゝこゝろちやうど
ゝこゝろゝ同ゝこゝろゝ恰ゝこゝろゝ書そ
わゝこゝろゝこゝろゝちやうどゝ程ゝ
ゝこゝけのゝこゝろゝめゝゝ朱子ゝ恰ゝ乃ゝ
あゝこゝれゝげゝ箱乃かゝゝこゝろゝ書ゝ
こゝろゝこゝやゝこゝろゝかゝゝ出ゝ
大学乃主言中庸乃中庸ちやうどかゝ
乃ゝこゝろゝで流ゝこゝろゝ乃極ゝこゝ
ゝこゝろゝ人の書ゝこゝろゝ

○小学先生毎日端坐して泥塑人のごとくにそ乃坐せるうちの立ちくつろぎ拱手するといへどもまづ生きるや一団乃和気と生生つきとのうつる心乃徳つよありて身の気けしいりをとどこりなくたゞやすらかなり

朱先庭乃先生に立ちぐひてまゐの中ゆ坐しぬとゝふかりひやられぬる

○小学先生字とつゝまることゝしてこゝ字のよらしまりきめはあるどゝ学ぶのゝ勝手乃書字乃紙

拭筆濡毫　伸紙行墨
一点　其中　聽一畫一心
敬宗　則一荒　取一所　則一惑
必　至一事　祈一明　厥一德

とゝいつまで而端一をすかりゝ敬ありゝ字とかゝ時のゝ
ゝてもといつもかゝ心ゝ

○朱先生乃拭筆とハこ乃敬の字をゝ乃中ゆ
よこゝゝふゝよかゝ心ゝ字ごこゝ
ふけゝふゝ心ゝをゝとゝあり伊川先生の一ゝ
すゝ三ゝつゝ去まゝゝつゝあゝ

たるふうりや

○祇園ゟ大震よとゝみちハ数乃こゝ有りとゝ
ゝ也ハ伊川信濃前なゝ[illegible]ハ船頭ゝ
くて船乃川ゞへらんと志けゝ[illegible]ハ船頭の人ゝ[illegible]
わゝさけびよ伊川ひゝゝ[illegible]
とゝ人大嵐乃風雷ゟ風ぐゝひたまいゝ[illegible]
こゝゝの事ありゝ[illegible]

○京都祇園乃人のつゝしめるを見ゝ[illegible]の波ゝ
こゝ乃数と打被らんとあざゝ[illegible]
面にゝ乃ゝ有りひてゝ[illegible]

○衣合宮ゝ[illegible]ハ書乃物ゝ[illegible]
にてゝれをバとゝふゝ[illegible]
分をわゝるゝ[illegible]
縅袍とゝて[illegible]
と乳ゝ[illegible]
ふゝ[illegible]

○恵ふ服ハ喪服ゝ[illegible]
とゝ婦のゝ[illegible]
とつゝゝ[illegible]

○飲食男せハ人乃大欲なゝ[illegible]

殊にやくつゝしむべきさまあり。色欲女色のことにお
らん男色のたぐひ人をし頑童をもちくふかきつゝし
めとなりは侫幸あり宋朝が美わざれはまねかれ
しと孔子ものたまへり。衛国の礼さまだりしも源
子がゆへなり。むかしや漢の高祖には籍孺よ徳じ広の
韓吏部も孟郊にいたらうちとけられしは東坡が風
水洞のあそびへいうよたゞざるなり。我朝にて弘法
大師淑唐にて来のまなりし中にて其言で孝通の
御時道祖王もそくに待童にて天下をとれへばなしえん
おく歳しまゝや破戒の比丘のはたゞれは法法は来なら

○一座しは法が弟子高雅が
たまひいつかしれたる山のいそはし
いとなは○いさうわまこことひしさりのし
とかがめしは大中ねとさてせにはぬ菅阿児行生
法の嘉子書写山のしなかつまでもそく九郎判官云
宮女もそのなおりし善知の松帆丸とは阿ふう
よふかくしよて奥下臣民に家の大刀をけ弁に
総とぞかんらうごろつまく学法を又道切捨のなの
つまそさんのたちぬかさまりしかんにし事どもてなり
○たゞさけはそるにしなしん見てるにおよびとかけれい

聖人乃中庸たるを称ずるつきまあんたるをいへ
どもしらずしらずにたゝんでゐるにおよばざる
で度をうしなふことあるをれば陶侃乃こけたる
ごとくいはゆる面々の人心奥さめぐりのまんなわ
べけまで分乃まりのとハたんそこそこ中庸するもい
とゝべし七賢八達おゞまりまたるど陶劉乃書
白酒乃国とせざるましこばそのうさ品かこゝ海
ゝゞ轉呂黎してそのつにしまあゝバ深酒乃上ま貢
しまゝびゝら伊酒の下撲渠とうてうそうど
邵堯夫の酔裡乾坤と酒乃上ま徐ゞられ文ちに製

しらずしも堯夫庵よりいくのまゝとそ
○大平記よりの上酒茶乃湯をゞり殷紂の酒
池肉林晋乃石崇奢の上元寇が去わざよりゞを
ゝりのん豆利茶乃ゝゝびゝ乃八品ふゝわけ茶
心度茶式よりゝとへゝわゝ紹門孫相陽孫
酒めゝ伯乃ゝゝゝじ花とゝそれ織田右府を
とゝゝぬゝ乃ゝゝゝゞて
国れゝ大茶の湯八道参入乃が去わざにゝゝり
○茶式よりゝゝて国ゞ乃ゝてわり稼よ茶ゞ茶法
ゝまゝゝ茶よりゝゝ紹相宗乃三茶

松本朱光紹隆利休その人ありてぞ古田織部小さ
き勇功ありしが利休ぐちの和尚をふりおそ
ぬしとおもひもやむ〜恵林法師の事ふれば指
要ふまでうけまじ孔顔とつ玉乃事相つゝ
つまとうおもひつゝ人ぐのくふ氏者和尚ぐ
とよびわんこと面目ある光賀ぐ公儀と同愛
称しよびたいつゞとおもふんぐ〜わつ人かさく
うくもつゞべ〜見面村ぐちやまんのことを坂上
つとあゝ〜

○小学教身篇よ実端とん〜小紅とのせら伊伊

とすて紅氏八人編とやぐうそれ分をつくきめう人
ものとさけばんやされ徒伊門祇礼句祝とてつゝ
しわも荘列が書ちてみられぐうつ時しとあれ
人とつゞべ〜

○紅ぐ光業まとて天竺國浄飯王乃太子ゆく
書ぐとわりしがナ九のもし父母妻子をすて〜和部〜
成仏して明よくうわまこそ三界の主ありとて又
王乃頭よとの品といでくせ玉よとこゝいてこ海
で、おゝ部せ〜めく先祖乃嗣ぐくるたちあ天利の

そぐ八二千けて飛ふ春ちの大ひとのなくなふ
きこ天ふ春ありと孔雀乃いまもめおり猶ほ名ま
来佛ふ天ひたひるまもせよ僧ま乃ふらはし
八部と出ろ対すでよ縁しとめ仏せ一めぐとろ春ま
ふよの我なる天つぐ行ふ八ふぞや

○仏法乃流八ふ九宗ナ宗ふ八われ倶舎宗
八法相宗ふ成実宗ふ三論宗
ふ八法華宗ふ真言宗ふ禅宗
ふ八浄土宗ふ八一心と就とふ

宗八事理絶妙とたて禅宗ふ出結人仏見性如仏
教ふ別伝ふ三文字とたて浄土宗ふ八一念称佛
即機無為ナ飛ナ念成就ニ三ふ事迅と称ひ新興
宗八浄土宗わいで日蓮宗ふ天台宗ふ法華と旨
とふ見みふとのくそ乃ふ仏ふ
春筆一の佛とふふとすもばうべて絶ふ童とふ
○ふ何ぞや京乃小野ふ仏ふ禅義のあるとを
ものふ乃ふ乃ふとふとわくしひがけふ雑ぞと
ふとおふふ八傳大王二人八菩薩菩成とて大士がふ
ふ乃大士乃ふ一切経と一切経とてんぐくとふんせ

ゆんそつとんざうとつくるろかあ一日乃はそうし
はきこハらうかそうおむわるこぶ門ハけてきたるとん
とゆまにいこちでうくわやらいうゆでうはこそ
つとんざうと一てんをれバるびわとたりゆべでる
どこたくこうと

○佛氏老氏とそつる老氏ハ佛氏とそつる
史とけさんこそ油とそくをがこと偽ちの二氏
とゆくくハとちるるものやたゞけゆこあるこん
まれあり酒芭巢よ念者こ禅門ゞ老氏とそ
つとまとわげく地獄とまわれゞしとそれ地

もあさ池ごくう紙ときくまにとそれへある智
ちわうわひるゆべしもれ寝室とのべ時京乃来
ふゆ牧宰掛ゆきつもしあいちくあまハなよ
ちうへで生産ちうとじやとうへ親でうけとた
一日にやさく笑とるこしハ地ごくへおちられたこよ

○孔子のそこふつぎれとのこまへ子髪を偽ちん
乃そうけつわやゆ神乃いんさまへたちぢそくこかこ
ふゆと社へ乃たゞこそとゆれもわゆ仏ゞまうふく
ゆふゆの親鸞ゞ書とゆそ法これまこあやしかこう
い偽ちん女わうとへさいうこせものあり

○馮貞白が文書の中の叙云に儒の品なおほくあ
りとて書けり。腐儒・俗儒・曲儒・陋儒・鞭儒・賈儒・穀
儒・顓儒・狂儒・近儒・覇儒・迂儒・猴儒・奄儒也とぞ
韓詩外傳にも俗儒・雅儒・大儒ありと云り。世の儒と
いはるゝものども、まことにこの品なの中にいづれにか
あたらん。目たゞしき人よく／＼見別べし
○儒者はひろくものゝ志るものなりとて、小学・四書
五経をばらく志りもせで、十三経もなく書をよみ
ほく志あなるもいはずもがな、ちゑのうごきひさと
ありながらのみあるをもおほしさいかんぞきん

ども文字志られば、わがなどつけるがごとき者の儒者
とおりひとつまのことをもて人をいとふ也
○大學・論孟・中庸は程子の表彰して是を四
書とは朱子の名づけられし。今の儒者のこれを
よみならふ大学章句・同或問・中庸章句・同輯略・或
問・論孟集註をば、よくみもせで、四書をくどう
がちがちわけしあきらかなるべくかどより正統ありなへる
まうすべし
○いにしへ易・書・詩・禮・樂・春秋を六経として
樂はほろびて五経とのこれり。其の五経とはしくいへ

よりかゝし易も陰儒乃とぶつことを伝まうに
く朱子本義乃定本なりあるハ儀禮周禮
とおさめハして禮記とともに中山がおやまり
とうけくあらされバ小学四書乃門庭とす近
思乃録よのかりてハ易ハ啓蒙も要とのべく志
家ハ一乃法もれ皆要ならずとわしくそ見へく朱
氏乃儀禮ふ及ぬ経伝ハ別よミ合べし書経の
集伝ハいまだなよし洪範乃えうみひハ蔡氏九
峯乃皇極内篇ふのくてるべし周易含書の
中に範数乃来隠あらくる所ある物とみてさら

礼ハ朱子の儀礼経伝通解よ黄勉斎の続
とくハ見て春よす又三礼を見るべし楽ハ蔡
季通の律呂新書古楽をつけりとそて春秋
ハ程朱乃定論ハなけれど大義とハおの世判
その義をよくしるものそ四伝を考べし胡氏通鑑綱
目を見て春秋乃筆法をさとるべきなり
○うらなひハ易の本そさりすて吉凶を弁ゆくとひ
さだむかいとよしさみちあり陰陽五行の志は
所よおるべし卦変を中卦をかんぐへ佛菩薩を卦
に配するハけしからず法師山伏などのつかうめうじゆるかかめん

ちしかき事なりも
○太平記乃巻馬を奏の事洞院相国面縛乃
こゝに惜うすや稜を渡天竜寺を尋ね忠
おさとゝ乃つくつとゝ初り菊房逆耳の云ふ
をきちらうつくさいさめ門弁寄分
ゐしの遠世ゝ山乃岩尾よそ信とかまりい
くらくとなを結ちとゝ地とゝとくあらと
てやうまくる陳おり
もゝんすいふ山をうさ世乃人とり
おくゝゝや庭乃杉よあさく舞

葉恩入西為義実報恩者
白歌皇卧弟皇山
曠物恩波費底軌
不見胸中花入逆
お家端的報親親
や去ゝ佩山ゝとひ江湖遍系けろの古列下
四乃新年にく風波乃雑よとうれ西影ゝ也
安房ゝさめとこかりれどうてうれうなり信とうなる
八伯乃義そや葉恩の文八伯経あり孝経よ父子
ゝく恩八天性やとゝりいんそこれとゝてんとゝとゝ

てらんいもうむじとよびてわやしりける白衣の
頃ハ天目禅師が大義渡に讃しあり大義渡
ハ莫大藥が母のきひさそ殺しわらをもて刀んざりし
所なりしが群玉韻府に見えたり絵廣法寶聯
乃天竹によせん會元にもみえし、乃虎もいむよや
但希叟が正宗贊にも大義渡頌攅数珍にも書
莫藤が法積とかめてなし藥房乃さまにしやうの
まにまどひ寒乃あとなまつみち志てねとて
わさましかまなん東陽が正竹録にも妙心寺乃
第二世授翁ハ藥房なりと書く偈山百といひ

風波に海竊しわぬといひし
◎水よ入て長く人と見る弖に安禅師が則天
宮中に入たまわる時皇后乃ひとしなりけるか海
乃法弘六代乃祖師これよりうるとハ大吉禅師
が径山會禅の気にさ云なりける事このそく禅
録にありくハ人乃まよかくて見るにも人の志えんふなりうつ人
よ言語道断のまりどもなりの
◎後継草にいのちなかけまいらせむかうおりなかく
とて四十にわたらねれとも志なんとそめやましこう
べければいあさましくたへ人見くうしきまわる

ゆへなりやされども人うまれて初めて由ふは論
にてかうなりし性ありて字あり清にて
志政に着ありてはしたがひ老てつくは老宅を
悼しと云ふ九ありても刑をくはへず期ありてやしなふ
と小戴礼の文なり三十字のうち嚴なるけれバ
藝ありて十ありてさらさざれバさらにも七十ありてや
ぶれ法にハおやまちあわりても由ぬりるべししハ大戴
礼の文なりとふさといへども綿よおかう論孔
子の字にてかくまれバ人なのを字ありて
三十字ハふてなきハちそこにそうずとあるなし

横渠のわけしてゆかくしとをびうんにすなる丁
五十二種十四字より聖人となるびて今となる字なる
也しかすを敎子の母を我へじくなはいふに河よ
とよんでほとめよと此はまじめなり孟子四十にして心
をうごかさぬ依川四十にして知性をさだめり程伊五十
四にて寧せしがその德敎子と一なり依川七十
五にて寧せしがそのみちゞ始もしたり横渠の
てきしところよおいんや朱子の云ん呂與叔
にひとつのならなかつくじ先ともつどいれそのつぶの
而のなつんなふん集めし呂の年なくバよし回也な

てうじ（長花の文福）は寿とはいとまうすなり
もとよりうつくしみ（の人）うちひさくあいてう
を（ありて）三年の間に聖賢の道をかんがへ
今の人たがひすぎてひさうにをかぐれそのの
面ばうりる長（二十）みてさうかばこ二十三
十にてさうかばこ二十たらひ九年にてさう
のうちもそれうあるさうでしいうなのは完
結の衛の武公は九年のみて抑の詩をたてて
自くまへをそうこうに編ちめ遠伯玉
五十にて四十九まで悔と云ふ三十みて三十

面郷公は八十にうくちる白めの龍涎こめ城中
堂屏は志ほかの母形てうさくひ原
壇老氏が流りて礼はめかるかゆへ
その美みて面らと孔子おひて志ざると城
ととそれの脇とうらめ魚めし佛むの比
よ志ひく礼義の味をもくとそうりぐつとうて
弱とうる武義ちにうりく極治判官が毒の
りく歌舞をかくはのりはぐくまとたりる
人のんを海ぐりうれいすまくらさとやうり極
見るの城たるぞうり

○古今よのの注所はすべてけり　見つつ
世をすてゝ学りの人をうらやまん
なよ竹のうきしたにいつらゆるもん
○萬葉集巻五に合歓歌一首并序あり序
つゝそ乃序よりあり父母乃わりをひとわとれ基
とゝりの人ゝと屢とゝねひでみのうゝ長伯生
稚ゝこのゆゝよと穢とゝ家とゝ立業とゝ
よ祖とをゝりそ乃まゝ人ゝ学ゝ
りこれ山上憶良が祖ゝ乃世をよもゝ他不
りゝのをゝとゝれゝ釈迦が三歳乃戒周孔の
三徳乃義と一ゝ乃ゝ教ゝ自家の業
ゝゝ乃ゝ世ゝ乃ゝ人ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
○乃家ゝ者ゝと家ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

結ととそて酒とのこ蓼双をとうしそ和とわう鮑
小さふ人へとろうるうこれはそしてたうをて
いやとのこのこのこの天蓋とうたうたうの月しびさ
なら摩申ともまもしろ無編より出さう伝昌
よいてふ孫起ハの西又九月乃蓋紙のよのうしく
かこあ柳お摩蜀三戸蟲又あの異間顔三新徒
あり羅家編柳づ又は酸するあり羅疾採餌より子
厚ゞ又と間顔ゞ得よりて傷ゆまさ山和わりと
とこしてわり法籍ゞ雷若乃結小惟麦雑甲ふふ
雑守廣申ーとこはう小我神乃庚申伝夏い祝ふ

○ゆ法ゞ家乃世まで八天自ゞ法わうとをうし
明和小ふりてこれわり法学もゆ朝りのさうんにあり
ぬ射摩閻八王陽明とたとびゞかそ乃ているけ
立雑沮より射鳴寳ゞとー城かめく傷よらうとか
こう西伝刑好寳こあまびかれし出家と見しう
天蓋地獄とあてこふ仏法とれあゞ天自ゞ申ふ
家乃天所より伝ていうよけうよ傷よらうとこあや
ゆ山べこまあゆ
○室極三帝乃市河よ家川乃かりは大生祭
ふ人こすのきこ世の祝ともまを山冨と寿ととれく

て出とまつることを聞人よりも先けるかんあざら神
絵とかきうり酒さうかとをひろうらふほうね彩留
入来とよりてうか熱鄙乃人これをこよ出とうりてき
よ名人うり産よりとうさひ舞てたりとをうつこと
まうりとうを出おれ国奏河揚うれをゆくうてれ
ほ屋乃れかとうらぬりんふぐりとのひてすめ
ざりけり河乃人
うをほよさはうことも神ときうけ多
とこうの乃人とうらをうを海ちも
とううふりまさに奏が来あり奏とうづまうらふ

子細八姓氏源よりんてうり今の世ても大生神爻
れ乃うをうまさがでうきすの世あうをを
うこまを乃
○天照太神こ姫乃神黒と瓊こ杵尊よさづけて
や国乃主しなひ天児屋根命夫太玉命を
して神乃とまりとてまを乃とをため先治さま
で神乃まを乃二ふりの剣二宝の和鏡を
もうつ神国とうけ一ものゆあり鈴ぬ乃活
河よ百源国ち乃伊入来しと尾要種よ乃国神とけが
しりうていこけめり種穂氏をををひ向原ち氏

ぞ、そ、れを先に置て、そのあとに開明の山岡寺を作るべ
らべめんと奏して種我氏と奏
とらうつくしく物のつくれて業後者と称して推古
の御時上宮太子種我氏にくらべて推古の御時
て仏法をうんはりし蘇我氏門
とかみしの家とうたとかみ
紀皇室とくらべとよ
と称してくらべ国紀皇室
をりかつらもの神乃つ
らはの神仏あ紀者合して
ひ

ひげ神社に用ひ
つまに神乃御名のこ
延喜式神名帳に日本国内
三十二社ありは
社とそこ先祖と社の同
二社ともに
仏ふ扶神乃に神代
薗社古物とひろくかんぐ
○伊勢外宮に国豊宮
国豊宮と豊受大神

太神宮は産土天照皇大神宮なり故に天
日靈尊とも申す也元亨釈書の神宮秘雑事記
よりしるしたる聖武帝の御夢の事として太神
と大日如来ありとゆめ覚の合掌する雑事の書を
見て宗旨とりたたせたまふ
だもとくを考へしに太神宮はゆめ覚なるひのわ
つるよりゆめ覚なるべし雑夢の説のるふい
ゆめを傳説とおもひて成湯の改るをなひ湯の明
帝に佛とゆめ覚て中國よりもろの神まで善
とおもひ先王の廟の礼の事は
にもとてありさまれだ聖武帝のとうかけしまと
ひたまへば御夢ハそのおもひの感りて事の実な
ハわるべしとおもふ或説に太神宮春伯ともそ
書けり春伯のうらなひ
よりて野馬臺の詩を集海姫氏國と太神とを女
龍とつかへ姫氏とおやまりてかりしの書に
東十日本紀の説に成よりるまりは淡成の天書
廣成の拾遺と傳姫世紀伊勢の二部のなかなる
どにてこうに見えたる記義よりかくあることは後金氏
本面氏の引て云ふ後世まりあり伊勢ふりてかるふす

とうや　去る寛文の人の和子とたゝひそ乃姓の事
なるふりて我祖ゆりとうの数あり玄徳乃とを
そくしゆりの良し登馬長乃結八信昌より代ゆりとう
うて書籍よりのらん梁の宣徳和尚が識文あり也
いと雑信乃中ゆりとて此者といひしとゝへ宣徳つく
まあるとし実信乃ゆりとりとよりたゝるゆりたり
正統紀より実朝の一書乃井信昌八長八右衛門
ありとりかとりゆ色くわさらあまりとりとゝ今
梁すゆ史紀より長乃泰伯幸ひそゆ子孫第
仲雍ゆりとゝ書より優へ見づゝ右伯ゆりとい

ふとゝゆ朱子紀新より長の子孫八みゆ仲雍より
ちあり泰伯西のらるしとゆりゆゆとゝ
梁あり史紀ゆ書書とのあ紀ゆゆとゆひて云
ふなるゆ百川学海より紀略として倭人ゆ云
伯ゆいちゆとゝ未紀とゝゆ續文献通考ゆ云
書書紀略のでゝゆりゆ自信とゝ我国の書
まるゆし新房乃わさらあまゝゆふげもなり
さりとて右伯がゆとゝ梁乃とゆ八宣徳まり
もとゝと右わざるしゆゆ又通雅前編周の元王ゆ
越裳長下に今日本に右伯のちゆゆ長ゆ乃毒

その文庫滅ぶへて傷となるらんとつゝしみ給ふ
まことに書あまりといへるふりのあり元まこと
の八代孝昭天皇二年あり第三姓氏源は和野
連い長子支の者わ出さらとゝりとゝり去れども文庫滅
よ入去い和歌の先のびしるの人りとわ我国の書を
去るびとが国乃まりと去るとひとゝよ高船倍俱
の口ふのうせて年代とたゞ人事一実とうなる事
つひくありを法い年邦りて傷去いかゝの故の
よ持とおしるうの結文りとを入て和書に入る
一新人い和語をたこうるれどかゝの書てわ

らあゆゝよ文筆よて日本紀ばでいえよ海ざるもかく
めるまり法法界ふれば他邦乃人なとがむべるどあ
まり人傷去い姫氏也乃去とりゝくを他と極
ひつけ佛者い大日要のあるよりゝく大日をりわ
りたこれみかせて去乃形とをゝ四重乃者人
ふたゞふ者大の也事也
○八幡い第十六代應神天皇ふてまり海と去い
神代いたるそわるゝ物天まゞて伊勢へ傷去て
二和ふ廟とあゞ先たくまつるゆへまるゝ伊勢
ふ海ゝうよ経文ゝゞまりて海ゝためゞ文法

第一なりし秋明の神は神祇にして我いこま
峯の田天皇八幡宮と宮ゐし祇宮崇ゐ
西絞祇三七社祇みてこれとのせり八幡を八四ゐ
新して蓋蓋と称ずゐ八仏法がけこゐ
色ゐ西絞祇四二所宮殿の神仏をこん
と云て唯四恵とさ祇とすべきなり大分天地の
あてゐなりしあゐ人陰陽の気とうけうゐ
しせいそうゐ山岳八神を八神を
ふそゐひて毛一日を日月とてゐ色まゐ祇をれ
ゐり像姫乃人ゐ

て丹心をりして清潔く奇怪したの物と云ふ
つゐ古の物と云ふつゐして古をたとし古を
古ゐ古ゐ古ゐ古ゐめぐゐまもゐまたゐす
ゐして古神よりゐ古ゐまゐ元ゐ古ゐする古ゐ
ゐん孫ゐ云ふ仏人神ゐ仏人圏と行ゐ発人紙
をゐ人ゐゐ古ゐ古ゐ古ゐ古ゐ古ゐ
まゐ云ゐゐゐ古ゐ古ゐ古ゐ古ゐ
かゐ古ゐ圏易ゐ霊ゐ履で墨水ゐ動ゐ
まゐと孔ゐ稽ゐして横書の霊ゐ
不善乃ゐ乃ゐ八陰陽ゐ古ゐ紙ゐ文ゐ紙ゐ

事も一朝一夕の為にあらず。あるじと宣ふ。聲
を高くゆるゝ。すゝ心をきざしたりの八幡社
とれるが芳蕾も新とたれうゝふすがさらを
ものゝはゝして賊子とだの家さゆゝりたの聖
人を道更とあるべくそこるべきさいなる
あゝずとなけるが祖を来とまるあびく源とあ
ゝゝ発ゝわゞ事にのそこて宗てさはあやま
つまりを源とゝいい心より一物をきくゝ
とゝ主ゝ庭安のゆゝさゝまるゝゝ天
比あり君臣あり善悪の移ひ新ひゞきのゝ

しをのまり欲とて人とれゝゝとゝ
ゝゝ法ゝよ業を流の物とゝはが
きくのゝゝして西よハさゝんとはしれ西を
ゝくきゝや代ゝゝ生ゝくゝゝづゝいやゝ心
ゝゝを花ゝゝ矢を今日と始ゝする
ゝあゝ云ゝゝゝゝゝゝ神ゝゝゝ
ゝゝゝ冥ゝ知ゝゝゝゝゝゝ
足神ゝゝ生ゝゝゝゝゝゝ居ゝゝ
とゝ門ゝ和ゝゝゝゝゝゝゝゝ
日吉八大宮二宮八幡宮ゝ十禅師

こゝを社まつりゆゑに国天神七代と結び
そゝくゝうつ七代八代一よ国さゝをゝる次の国狭
槌ゝる次よ豊斟渟ゝる次よ泥土煮ゝる次よ沙土煮
ゝる次よ大戸之辺ゝる次よ面足ゝる次よ惶根
根ゝる次よ伊弉諾伊弉冊ゝる也国ゝた
ちゝる八ゝ神ゝ天御柱ゝ地乃柱ゝふ
葦牙ゝ如くたちゝの神ゝ次て神ゝ
ゝり国常立ゝる也ゝ也神代巻の結ゝ
結生ゝ社まつり八葦牙ゝ如くゝる神乃中ゝ神
いまゝ国之ゝ之ゝる也ゝ也ゝ

あゝまつりゝ国ゝうゝ乃ゝる八水の神ゝ也ゝ
ぬ乃ゝる也火の神ゝ次ゝふの神ゝ次ゝ乃ゝる
水の神ゝ次ゝ乃ゝる惶〇の神ゝ次ゝ乃ゝる大ゝ也ゝ也ゝる八金ゝ神
又彩生ゝ乃ゝ次ゝ也彩の神八ゝ一天神
ゝ次ゝ乃ゝ中ゝ也ゝ化ゝ次ゝ乃ゝ号ゝ也ゝ
ゝ也ゝ也ゝ火乃神ゝとの〇一号ゝ也ゝ也ゝ法
陽ゝ也ゝ次ゝ也ゝ水金ゝ神ゝ乃〇二号ゝ也ゝ
ゝ八ゝ陽中乃法ゝ神の次ゝ乃ゝ也ゝ次ゝ
ゝ也ゝ八陽神ゝ也ゝ八法神ゝ也二神八也

約の秀氣とそ[illegible]ひ天神ちと擬戈とそ[illegible]
[illegible]敏叔五嶽よりぶうとゆ[illegible]人の[illegible]とそ[illegible]
[illegible]ゆ人[illegible]おりそて天神七代[illegible]日吉八法[illegible]
日吉の御法敏の[illegible]一物[illegible]ちと[illegible]
法敏山[illegible]ちと[illegible]て山[illegible]あ相八二神の[illegible]
御相の[illegible]也伝聞[illegible]心相[illegible]の[illegible]
業[illegible]仏十一[illegible]ちよ伝教大師[illegible]相梅
樓[illegible]ちけく[illegible]ときさ[illegible]
[illegible]ちと[illegible]ちと世の人御相[illegible]
師が法[illegible]拾業集の[illegible]八法[illegible]

の中の法[illegible]ちと[illegible]貞舞法師が七[illegible]
ゆ[illegible]ちと大[illegible]八大乙貴命[illegible]八國[illegible]
なり[illegible]扇往復と[illegible]貞[illegible]ちゆ人[illegible]二[illegible]
げく聖[illegible]八天[illegible]種[illegible]ちり八[illegible]八[illegible]狭
[illegible]ちり八人の御[illegible]とひ[illegible]新[illegible]
[illegible]ちと八[illegible]人八伊特[illegible]也十
禪師八[illegible]杵[illegible]也國[illegible]ちと[illegible]十[illegible]
[illegible]ゆ[illegible]御[illegible]ちと[illegible]
八男三女の[illegible]ゆ[illegible]言とちと
[illegible]人[illegible]現[illegible]ち敏山八[illegible]ちと大乙貴命

小七の神名をあらけるを小祢七星とあるを
て勧請しそこなつたるを伊勢国三河の二
十一社祀るとまつりくふくたりかるべし舊事
紀に大山上咩神比叡山坐とあり 抑七代の間
代と立給の神名をしるしるふ八神皇実録の結
七代の号号を後あくるを知わ八釈日本紀
乃後名りつのまもの口伝あるまるや
○白山八伊弉冊尊なるとそ神まし
○美賀尻同ち
○愛宕八伊弉冊尊なるとそ神まし或八面足尊

ゆくまゝ神とそとて女かの源紀よりさ
祢一日小千人とそ後ちんとゆくまゝ八今日
多知の祢さバれそ百人うまんとゆくまゝ
とゝへつとさまつさなぎつとなる人町くのまゝ家
祢一代まそうしかてあり
○熊野八伊弉冊尊なるとそまし神と
○稲荷四座の勧請口伝あり或八伊弉冊尊或
八大己貴命ゆくゆくまゝ神まして結もあり
○祇園八素戔嗚尊なるゆくゆくまし神
○西宮八恵三郎命なるとゆくまゝ世乃人の

大己貴神のりたまはくこの海をわ
れとともに海をてらさんとのたまふ
とこの海をてらすものは誰か
なるかとのたまふ答へ申さく我
ひだりの海をてらさんとおもふ
とのたまふ答へ申さくわれは
ひるをてらしくらやみを
きらふとのたまふ答へ申さく海の神
ぶくしまつ又大己貴命に海の事を
神にゆだねたまふとあまはしの神

あり大己貴神幾
ばくかの年を経て
おのづからまた事あり
ものみな
大國主の神と名
げけるくにまつる國
神にてやわれ作物に大きなる益
あり新羅事依大國主神をもつて今
そこなりとの乃ち海を渡りて大
乃大國御魂神をもつていまに
ありわれは葦原の宮に住
釈氏は仏法を説き

さいわい給ふ八のくに大ぬし給ふ給ふ
なり幸神の祝ぎ給ふ人にて是をも
ぞうぶかりなりと伝へそうぶくし
大社ハそのとの足しなかあるゆゑの
足しとうくまし給ふ二神　をも一父ま
の利

○大和ハ神ぞふしつれ命給ふ神一まし
○三輪同お
○下鴨同お
○石上布都神まして海まし

○松尾ハ大山上咋神にて海まし
○天満天神ハ世嘉の人命なりまし人の霊魂
霊ものゆゑ大こも命とゆゑにらくとわつせて天
下を祈きめのひ文民の病のためふ療方とぞ免
たまへとして名をけらの生風あり
○本懐ハ天忠穂耳なるて海まし
○箱根同お或ハつさなのみこと或ハ彦火火出見
そのみこと海とし海ましいと
○北野ハ廣く神なるて海まし文をみ丸見
こと文ひこかてこの月をしく海まし天満宮

よしよ菅原氏識ヶ亜毘乃縁起にハとしかみのまるゝそ
御まんにてこのまるとハくらんじやうしまつといふなれど
とかうふ社ニてハ中社ニハ木をさしあまいはこれらくまんぎや
うらそのさい敏目并紀よりぐさのみことひとかりてこ
乃かんてふさわいせしにみてしと嶺飛鳥聲記り
まつりまうとあり

○富士ハ木花開耶姫をまつれり

○春日ハ武甕槌命齋主命天児屋命姫御神
神なりてまします四所大明神とは申なり

○吉田 同上

○太玉ハ天太玉命をまつる也これハなかとみとハのまつる
の神也太の祖小神代紀にあらたわし御まへ日本紀
八令ハ親王乃えびなまいの親王ハたぐひまれなるの志
ふにて学ハ数天文暦と道家しを森羅に仏書
わたりやまとにかぐ力の筆をそむれりとそ菩薩に
あたりて御遠よして雅知神代乃巻心誠よ
扨まへ聖皇國やとおもふけるハ事するなあまつや

○古梨なり

もとむハ空にあるかハさしとわくれめし
そろハなれめし凪ハ神そさいつせ

天てらすおほかみいくうちの神代をも
をしへそこなはいにしへのこけき
神風やうらうらの音のはやうらら
ちはひやうたの清代よ言八重
かすそをのあまはは国かにかをれた
たのひいはかしー伊勢乃神うた
すくらをのてはをやはみことのを
つるへくいはふををのうや人
かけはくをかこきとの言そうら
なををきあらはそをよをるらん

五十鈴川神代乃うたかけをめく
いまもなをわはれ林若枝の身
神風やつすはは河のうやうら屋
つるあ代を絶んとなてをめうん
神代をかつをすめる石清水
千年はのうまひうもれ
石清水はるれ乃をををうけつをく
ををををををををうん第代まをふ
石清水はをををとををふわをを
人へをををを神神やうをを年

ゆ人ゆいのふまつてきてこりう
そむかねをうらを祈やうくらを
ゆさふ海ことのみたらよかのひ時を
いのゝもこゝそも祈やちもん

元文二丁巳年十月吉日
心齋橋筋唐物町
浪華書林　北田清左衛門板